地宝のひびき

ー和歌山県内文化財調査報告会 2024ー報告資料集

荊木遺跡　竪穴建物群

- 「日高平野における弥生時代後期の集落
  ー日高町荊木遺跡の発掘調査ー」
- 「西国分寺廃寺の発掘調査
  ー那賀郡における白鳳寺院の一事例ー」
- 「明治時代の友ヶ島砲台
  ー由良要塞跡友ヶ島地区第１次確認調査ー」
- 「紀州徳川家初代　徳川頼宣が建てた水上楼閣『観海閣』の礎石発見か!?
  ー和歌山市名勝和歌の浦　観海閣整備工事に伴う調査ー」
- 「重要文化財増田家住宅表門の保存修理事業
  ーナマコ壁の補修と耐震補強ー」

令和６年１１月２４日（日）

主催：公益財団法人　　和歌山県文化財センター

会場：岩出市民俗資料館

開催にあたって

『地宝のひびき－和歌山県内文化財調査報告会 2024－』は、文化財に対して共通の理解と知識を育んでいただき、県内の発掘調査の成果等を県内の文化財担当者が報告し、その成果をいち早く県民の皆様に提供することを目的として企画しました。県教育委員会や県内各市町村の文化財担当者と連携し、第１回目を平成 18 年度に開催して以来、今年で 19 回目を迎えることができました。

今回は、５件の報告と４件の誌上報告が各文化財担当者からされます。県内では本誌に掲載できなかったものの、多くの発掘調査や建造物保存修理が実施されており、それぞれが地域の歴史を知る貴重な手がかりとなっています。本報告会を通して、少しでも文化財を身近なものと感じ、また文化財の保存や活用についても考えをめぐらせていただく機会にしていただけたらと考えています。

最後になりましたが、この報告会を開催するにあたり、ご協力を頂きました多くの機関、関係者の皆様に深く感謝の意を表する次第です。

令和６年 11 月 24 日　　公益財団法人　和歌山県文化財センター　理事長　櫻井敏雄

地宝のひびき　―和歌山県内文化財調査報告会 2024―　開催日程・目次

開催日時　令和６年 11 月 24 日（日）　13 時 00 分～16 時 50 分

会　　場　岩出市民俗資料館　岩出市根来 2306-1

報告内容　*(12 時 30 分　受付開始　13 時 00 分　開会挨拶)*

13 時 10 分　報告１「日高平野における弥生時代後期の集落－日高町荊木遺跡の発掘調査－」…… 2
日高町教育委員会　白井　諒　氏・(公財) 和歌山県文化財センター　石丸　彩

13 時 50 分　報告２「西国分寺廃寺の発掘調査－那賀郡における白鳳寺院の一事例－」…… 4
岩出市教育委員会　本多　元成　氏

14 時 30 分　報告３「明治時代の友ヶ島砲台－由良要塞跡友ヶ島地区第１次確認調査－」…… 7
和歌山市文化振興課　冨永　里菜　氏

(15 時 10 分　10 分休憩)

15 時 20 分　報告４「紀州徳川家初代　徳川頼宣が建てた水上楼閣『観海閣』の礎石発見か!?
－和歌山市名勝和歌の浦　観海閣整備工事に伴う調査－」…… 9
和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課　金澤　舞　氏・仲辻　慧大　氏

16 時 00 分　報告５「重要文化財増田家住宅表門の保存修理事業－ ナマコ壁の補修と耐震補強 －」…… １１
(公財) 和歌山県文化財センター　多井　忠嗣

(16 時 40 分　閉会挨拶)

誌上報告　「弥生時代後期の土屋根建物－旧吉備中学校校庭遺跡の発掘調査－」…… １３
有田川町教育委員会　川口　修実　氏

「二重の堀を巡らした山城跡－御坊市　八幡山城跡の確認調査－」…… １５
御坊市及び日高郡６町埋蔵文化財保護行政事務協議会　川崎　雅史　氏

「太田・黒田遺跡でみつかった古墳時代前期ガラス小玉の土製鋳型－県内初の出土事例（第 97 次発掘調査）－」１７
(公財) 和歌山市文化スポーツ振興財団　藤藪　勝則　氏

「西田中神社羊宮神社本殿・八幡神社本殿の保存修理－西田中神社の社殿からみた「田中荘八社」－」…… １９
(公財) 和歌山県文化財センター　寺本　就一

１．本書は公益財団法人　和歌山県文化財センターが開催した『地宝のひびき－和歌山県内文化財調査報告会 2024－』の報告資料集である。
２．本書掲載資料の中には、正式な報告書が刊行されていないものが含まれているため、今後各資料の位置付けが変更される可能性がある。
３．本報告会を開催するにあたり、岩出市教育委員会及び岩出市民俗資料館をはじめ、県内各自治体の文化財関係部局・担当課等から多大なるご協力を得た。記して謝意を表す次第である。
４．本書の編集は、石丸彩（公益財団法人　和歌山県文化財センター）が担当した。

日高平野における弥生時代後期の集落
－日高町荊木遺跡の発掘調査－

日高町教育委員会　白井　諒
（公財）和歌山県文化財センター　石丸　彩

１．はじめに

荊木遺跡は、日高町萩原に所在する。従前までに弥生土器が採集されており、遺物散布地として周知されている。

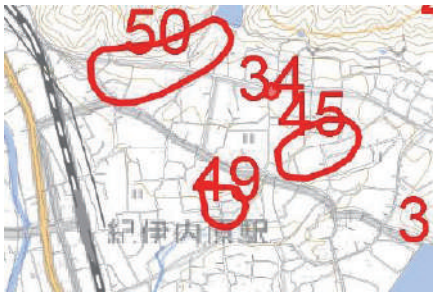

図１　荊木遺跡の位置
（No.49、S=1/20,000）

２．調査成果

調査地は標高 14m ほどの微高地に立地し、調査地の現状は旧耕作地で平坦地となっていたが、発掘調査の結果、旧地形は北から南に、また、東から西に向けてゆるやかに下る地形であることを確認した。

検出した主な遺構は、調査対象範囲の西側において、竪穴建物を４棟検出した。方形のものが３棟、円形が１棟である。その東側において、掘立柱建物の可能性がある柱穴を検出している。

また、道路部の東端において、方形周溝墓の可能性があるＬ字形の溝状遺構を確認した。その西側には谷状の落ち込みがあり、南側擁壁部においても延長部分を確認している。このため、谷状の落ち込みを区画とし、西側は居住域、東側は墓域として機能していた可能性がうかがえる。

出土遺物は、弥生時代後期後半の土器が多量に出土し、検出した遺構の所属時期も当該時期であると考えられる。それ以降の遺物は、奈良時代の須恵器や中世の瓦器がみられたが、それらの時期に属する明確な遺構は検出されていない。遺構が検出された地山面の直上には黒色の土層が堆積しており、その層には多量の弥生土器とともに、奈良時代の須恵器や、中世の瓦器も含まれていた。このことから、黒色の土層は弥生時代に堆積した土層ではなく、古代もしくは中世以降に耕作地として造成、利用されたことに伴い形成されたと考えられる。

３．まとめ

日高平野における弥生時代後期後半以降の集落の立地は、低地における遺跡の発見事例が多かったが、荊木遺跡における発掘調査の結果、標高 10 ｍよりも高い微高地における集落形成の一端が明らかとなった。

【参考文献】

石丸彩編 2024『荊木遺跡―宅地造成に伴う発掘調査報告書―』日高町教育委員会

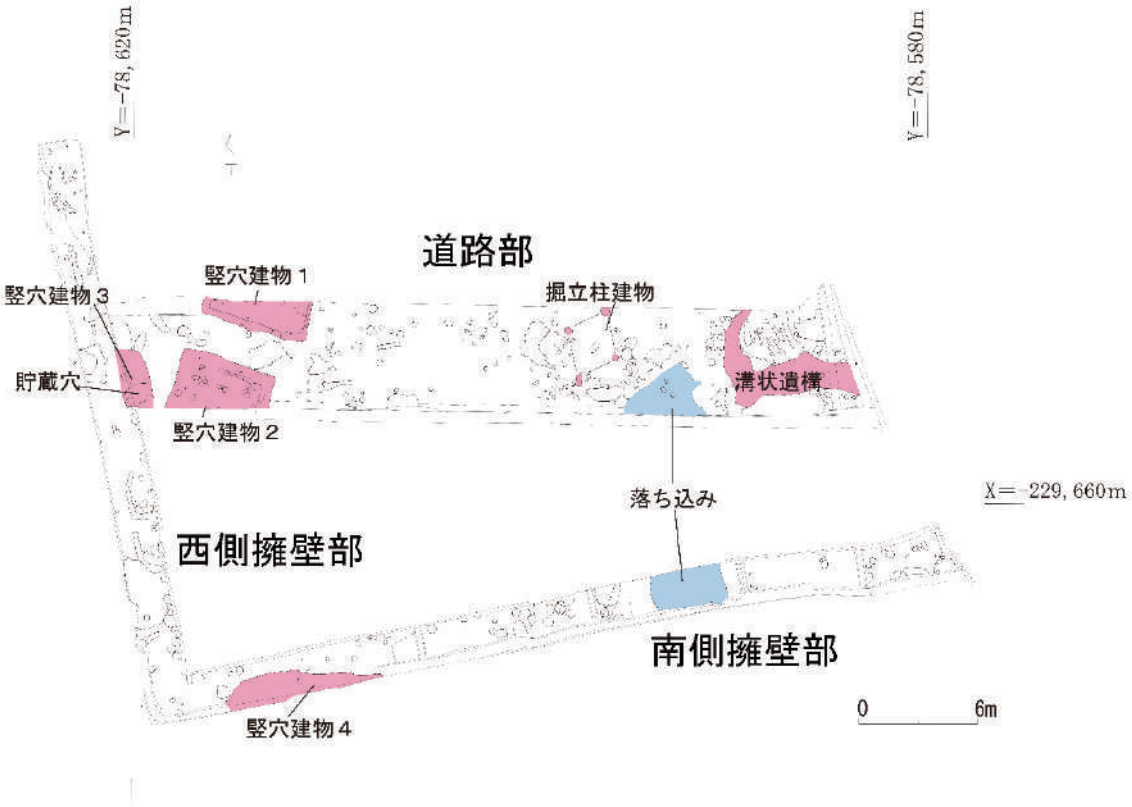

図２　平面図及び遺構分布図（石丸編 2024 を改変）

１．　弥生土器　甕

２．　弥生土器　高坏

３．　鉄鏃

４．　弥生土器　壺（口縁部）

写真１　荊木遺跡出土遺物（日高町教育委員会提供）

西国分寺廃寺の発掘調査
－那賀郡における白鳳寺院の一事例－

岩出市教育委員会　本多　元成

１．はじめに

西国分廃寺は、岩出市西国分に所在する古代寺院で、紀の川市東国分にある紀伊国分寺跡の西方800mに位置している。

この東西国分村の２寺院については、古くは、天保 10 年刊の『紀伊続風土記』巻元三十に記されているように、西が国分僧寺、東が国分尼寺と考えられていた。しかしながら、昭和 48 年度から 50 年度にかけて、和歌山県教育委員会が行った東国分の発掘調査によって、紀伊国分僧寺は、西国分廃寺ではなく、東国分の国分寺跡であることが明らかとなった。

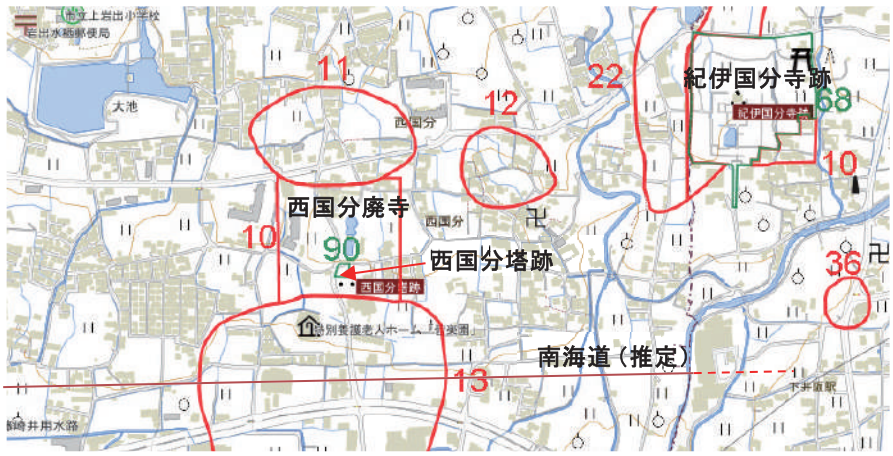

図１　西国分廃寺位置図

西国分廃寺の調査については、昭和 50 年度から昭和 53 年度にかけて和歌山県教育委員会が 4 次にわたり発掘調査を実施しているが、塔跡の確認にとどまり、古代寺院の伽藍配置の解明には至っていない。

検出されている遺構や出土遺物などから検討すると、西国分廃寺は、奈良時代前期（白鳳時代）に創建され、奈良時代後期（天平時代）に再建もしくは改修され、平安時代以降は廃絶したものと考えられている寺院である。

２．調査成果

道路建設予定箇所に調査区を設定し、調査を実施した。調査区の全体で遺構を検出しているが、北側は水田化の削平が著しく、また密度も低い状況であった。それに対し調査区の中ほどから南にかけては柱穴やピットが数多く検出している状況である。

検出した柱穴を検討した結果、４棟の掘立柱建物跡を検出することができた。いずれの建物も、建物の軸は北方を示している。建物跡として確認できない柱穴などもあることから、数回にわたり建物の建て替えが行われているものと考えられる。いずれの建物も

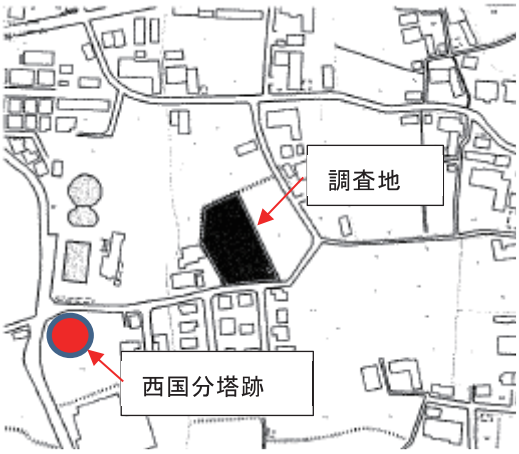

図２　調査対象地

調査区外に続いており、建物の全体を確認するには至っていない。

調査地の南側において、東方から延び、調査区内で南側に折れ南方へと続く素掘りの溝を１条検出している。溝の深さは、11 ㎝～17 ㎝あり、埋土にはシルトが含まれていたことから、この溝には流水があったことを確認することができた。溝からは、須恵器や土師器の細片が出土している。出土遺物は奈良時代前期（白鳳時代）のものと考えられ、検出している遺構の中では早い時期にこの溝は埋まっていることを確認することができた。

ＳＫ−２４は、確認調査時には、溝と考えていたが、調査の結果、不整形土坑であることを確認することができた。この土坑に堆積している褐灰色土からは、先にも触れたが比較的大ぶりの土器の破片（須恵器・土師器）が出土している。また、焼成の甘い須恵器片も混じっていることから、この近隣において須恵器の生産が行われていた可能性が考えられる。

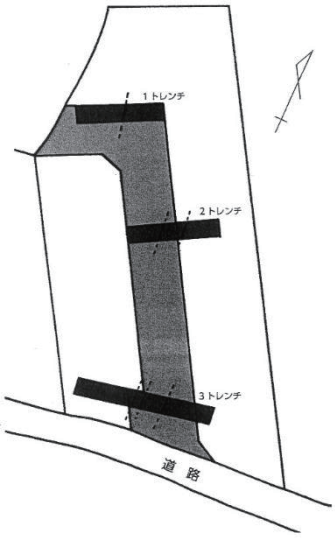

図３　調査区位置図

調査区の南側において、ＳＸ−０１・０２の不整形な土坑を検出している。いずれも須恵器・土師器の細片が出土しているがその量は少ない。

出土遺物の大半が須恵器である。器種は蓋・杯・皿・壷・鉢・甕であった。時期としては、７世紀後半から８世紀初頭にかけての時期のものである。

調査区の北側においては、ウメガメ遺構を１基検出している（ウメガメ０１）。埋められていた甕は須恵器で、底部が地面に埋められた状態で出土している。地中に埋められた甕の内部からも須恵器甕の破片が出土したことから、接合を検討してみた結果、ほぼ復元することができた。このことから、この甕は廃棄するに際し、地上に出ている部分を壊して甕の中に投棄していることが分かった。甕の底部には、孔が開けられていた。観察した結果、生産された後孔を開けているものと考えられる。須恵器大甕を地中に埋設するにあたり、排水のための孔ではないかと考えられる。

３．まとめ

今場所における調査を実施するにあたり、西国分廃寺の東側を区画する溝が残っていないか確認することを目的としていたが、区画溝の遺存は認められなかった。

建物跡をはじめ、溝、土坑、不明遺構等を検出することができたが、いずれの遺構も後世における水田化に際し削平を受けていることを確認することができた。

検出した遺構の中で、最も古い時期の遺構は、ＳＤ−０１で、出土遺物などから西国分廃寺の創建の時期（白鳳時代）と重なるものと思われる。

柱穴の検出状況から、建物跡を４棟確認することができたが、これらの建物は、いずれも同じ主軸を持つことから、同時期の建物である可能性が考えられる。建物の時期としては、出土している遺物の状況から判断して、白鳳期の西国分廃寺より新しい奈良時代後期の建物跡の可能性を考えておきたい。

本調査においても、既往の調査結果同様、奈良時代前期（白鳳時代）の創建時期の遺構と、奈良時代後期（天平時代）に再建もしくは改修された遺構を検出することができた。

写真１　遺構検出状況（南西から）

写真２　遺構掘削状況（南から）

写真３　遺構掘削状況（北東から）

写真４　須恵器大甕（底部）検出状況

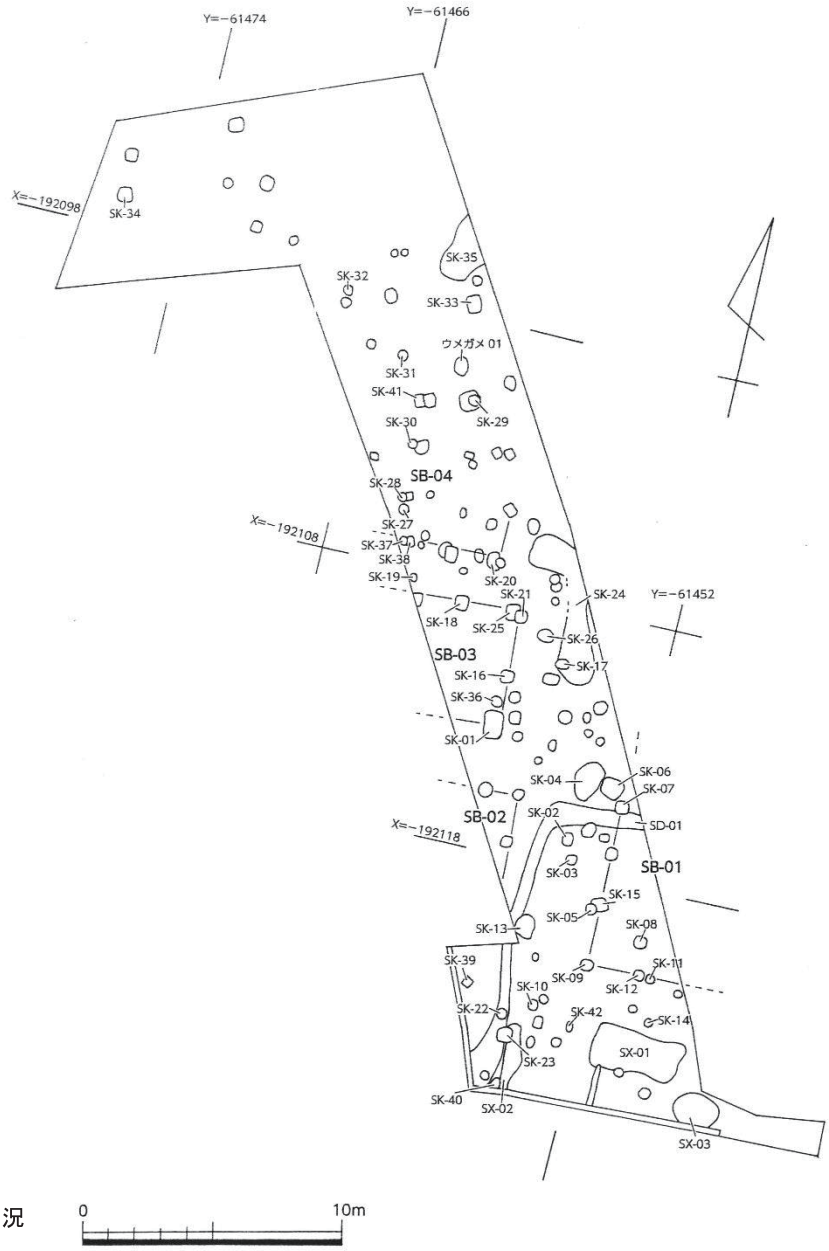

図４　検出遺構平面図

明治時代の友ヶ島砲台
－由良要塞跡友ヶ島地区第１次確認調査－

和歌山市文化振興課　冨永　里菜

１．はじめに

明治時代、敵国の軍艦への防御のため、日本各地に砲台を備えた要塞が築かれ、東京湾要塞から建設がはじまり、次いで対馬要塞、下関要塞が建設され、それに続き４番目に由良要塞が建設された。由良要塞は、明治 22 年（1889）～明治 38 年（1905）に、京阪神一帯を守るため大阪湾の入口である紀淡海峡の両岸に、砲台 18 ヶ所と背後を守る堡塁 9 ヶ所が築かれた。海峡の中央に位置する友ヶ島は、友ヶ島第１～第５砲台と虎島堡塁のほか、発電所・電燈所・火薬庫・砲廠等が建設され、それらをつなぐ軍用道路が島中に張り巡らされ、まさに要塞の島となった。

２．調査成果

令和６年１～３月に、友ヶ島各砲台周辺の付属施設（砲具庫・弾廠・厠・井戸・監守営舎等）の分布調査と、友ヶ島第３砲台・第５砲台の砲座の内容確認のための発掘調査を行った。

第３砲台は、明治 23～25 年（1890～1892）建設、備砲は 28cm 榴弾砲８門で、友ヶ島で最も規模が大きい。発掘調査では、直径 5.4mの砲床に 52 か所の穴があり１か所に大砲を固定した金具が残存した。また砲床に設置したとみられるコンクリート板片が多数出土した。

第５砲台は、友ヶ島で最も新しく、明治 33～38 年（1900～1905）建設で、備砲は斯加式（シュナイダー・カネー式）12cm 速射カノン砲６門である。砲座上には２か所の砲床と７か所の弾室がある。砲座の発掘調査では、直径 2.6mの砲床の外縁部 12 か所に深さ 70 cmの穴があり、角棒状の部材を差し込んで大砲を固定したと考えられる。

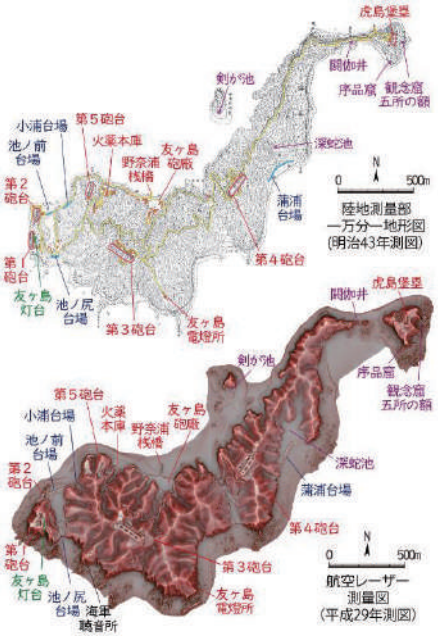

図１　友ヶ島地形図

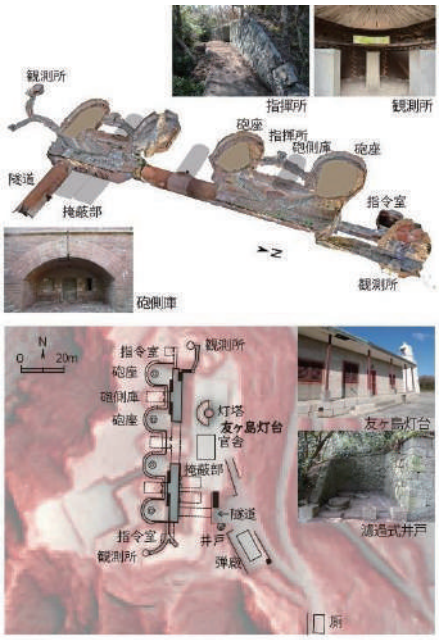

図２　友ヶ島第１砲台　俯瞰図・平面図

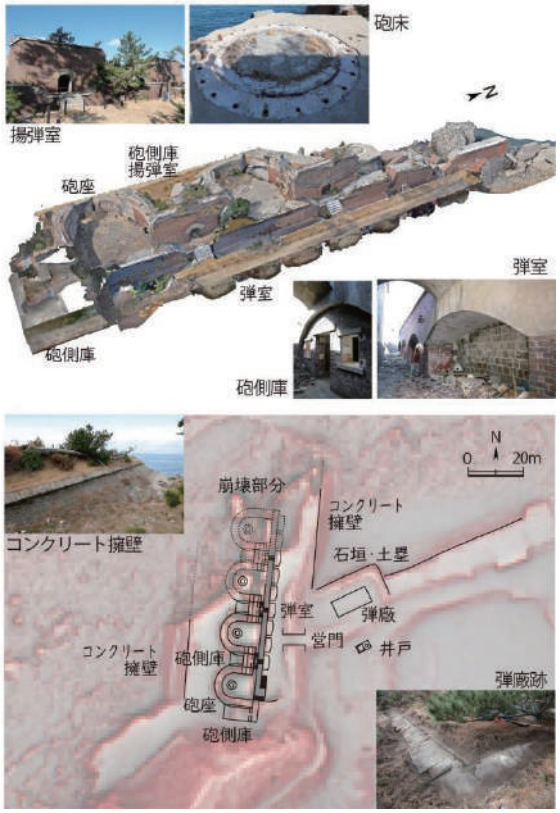

図３　友ヶ島第２砲台　俯瞰図・平面図

図４　友ヶ島第３砲台　俯瞰図・平面図

図５　友ヶ島第４砲台　俯瞰図・平面図

図６　友ヶ島第５砲台　俯瞰図・平面図

紀州徳川家初代　徳川頼宣が建てた水上楼閣『観海閣』の礎石発見か!?
－和歌山市名勝和歌の浦　観海閣整備工事に伴う調査－

和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課　金澤　舞・仲辻　慧大

１．はじめに

和歌の浦は、干潟・砂嘴、丘陵などが織り成す風景や景色が大変美しいとして、万葉集にも詠われた古来より名高い景勝地である。その芸術上または鑑賞上の価値が高く評価され、平成 22 年度（2010）には国の名勝に指定され、平成 26 年度（2014）には東照宮・天満宮などが追加指定されている（図１）。この名勝和歌の浦を構成する『観海閣』は、紀州徳川家初代徳川頼宣により慶安年間（1648～1652）に、和歌の浦から紀三井寺を眺望（遥拝）するため、木造の水上楼閣として建立された。その後、何度かの建て替えを経て、昭和 45 年（1970）に和歌山県により和歌公園の施設としてコンクリート造で整備された。しかし、この観海閣も近年老朽化が進むなどしたことから、再建を行うため令和３年度（2021）に解体された。和歌山県では、令和５年度（2023）より写真などの記録が残る慶応期再建の観海閣をモデルに、木造で観海閣の新築整備工事を実施しており、今回の調査は工事に伴う立合いとして行った。

図１　観海閣の位置

２．調査成果

今回の工事立会により、慶安年間の創建当初とみられる観海閣の建物礎石が８基確認された。このうち、西側２列の５基は原位置を保つが（図２）、残り３基はすでに原位置になく、うち２基は現地周辺に取り上げている（写真１）。みつかった礎石はいずれも砂岩製で、中央に柱を建てるためのほぞ穴がみられる。礎石は、その岩質や大きさ、加工方法から大きく３つに分けることができる。１つは、後世の立て替えに伴って壊されたのか、欠損により全体の形がわかりにくいが、平面形が確認できる範囲では南北長さ 90 ㎝で、上面に７寸（約 21 ㎝）のほぞ穴や一部でその周辺に凹みが確認できるもので、妹背山護岸の石垣最下段に組み込まれているもの（図２○）、２つは一辺約 90 ㎝角の正方形で、高さ約 70 ㎝、上面に一辺 50 ㎝角の凹みと７寸（約 21 ㎝）のほぞ穴をもつもの（図２○）、３つは一辺約 50 ㎝の立方体で、上面に３寸（約９㎝）のほぞ穴をもち上面や側面の一部を化粧仕上げするもの（図２○）である。このうち、１つめと２つめは、上面に方形とみられる凹みと同様の寸法のほぞ穴がみられることから、礎石に円形突起を差し込む直方体の石柱がたてられていたものとみられる。一方、上面や側面の一部に化粧仕上げを施し、

上面に凹みをもたず、ほぞ穴の寸法も小さい３つめは、当初は陸側に配置された可能性がある礎石で、この礎石の上には木製の円柱が建てられていたものと推測される。

築造時期は、礎石の一つに矢穴が確認できるものがあり（写真２）、その矢穴の形状や法量を北野隆亮氏の研究成果に照らし合わせた結果（北野 2023）、並びに礎石の一部が妹背山護岸の石垣最下段に組み込まれていることから、徳川頼宣が慶安年間に建てた創建当初のものである可能性が高いと考えられる。

３．まとめ

観海閣は、江戸時代から現代にいたる和歌の浦の美しい風致景観を形づくるものとして、大変重要な建物である。今回、創建当時の建物礎石が発見されたことにより、十分な資料がない創建当時の建物の建築位置や構造を紐解く上で、重要な手がかりを得ることができた。今後、創建当時の観海閣の構造復元に努めていきたい。

【参考文献】

北野隆亮 2023「和歌山城跡における石組遺構の変遷―内郭にみられる石垣・石組溝・石組溜枡・石組井戸の成立と展開－」『江戸遺跡研究』第 10 号　江戸遺跡研究会

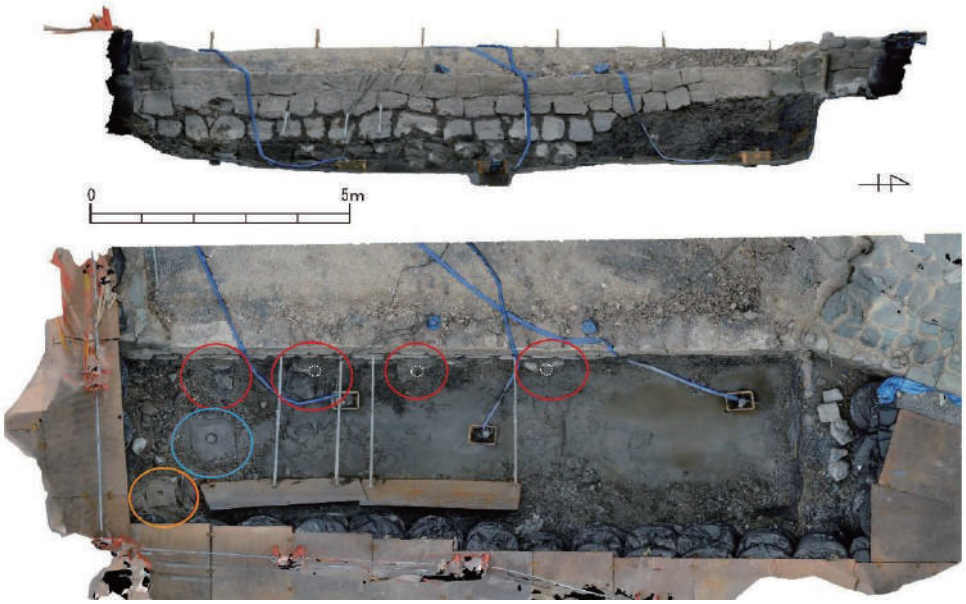

図２　調査地状況（上面：護岸側面図、下面：平面図　※○は発見された礎石位置）

写真１　取り上げた礎石

写真２　矢穴をもつ礎石

重要文化財増田家住宅表門の保存修理事業
－ ナマコ壁の補修と耐震補強 －

（公財）和歌山県文化財センター　多井　忠嗣

１. 増田家住宅について

増田家住宅は岩出市曽屋に所在する。紀の川の藤崎井堰からの用水により開発された地において代々大庄屋を務めた旧家の屋敷構えが残り、宝永３年（1706）建立の主屋と正徳２年（1712）建立の表門が昭和 44 年に重要文化財に指定されている。今回修理した表門は、屋敷地の南正面に建つ幅 27m の長大な建物で、今も美しく管理されている水田と正側面に施された重厚なナマコ壁のコントラストが当地の歴史を物語り、美しい景観を成している。

写真１　表門　竣工全景

２. 表門の保存修理事業について

主屋と表門は昭和 61 年に重要文化財としての国庫補助事業として根本修理が施され、表門は全解体を行った上で、詳細な調査成果を反映し、現状変更許可を得た上で中古に撤去されていた西端や厩など改変部分の復旧を含む修理が実施された。

前回の修理から 30 年以上が経過し、ナマコ壁の漆喰の剥落が進んで来たため、令和３年 11 月からの２か年度で、左官工事を中心とした保存修理事業を実施することとなった。

表門は従来の用途に準じ、主に農作業用具や什器、建具類の保管に用いられてきたが、地元の小学生らが利用する里道に面することや今後の活用を見据え、今回の修理に伴い構造解析を実施し、必要に応じて補強工事を実施し、十分な耐震性能を確保する方針となった。

構造解析の結果、耐震補強が必要であることが判明し、工事で発生する振動等が左官工事に影響する恐れも懸念されたため、左官工事は破損した漆喰の解体と瓦材の取り付け調整までを先行

して行い、補強工事実施後に漆喰を施工する方針とした。

３．ナマコ壁の修理

ナマコ壁は、荒壁の上に正方形のタイル状の瓦を固定し、目地を漆喰で仕上げた印象的な壁の仕上方法である。見た目の美しさだけでなく、建物の下半を瓦と漆喰で固めることで、雨水による建物の腐朽を防ぐ役割や、火災に対する堅牢さも併せ持つ伝統的な仕様である。

写真２　漆喰の剥落が進んだ修理前の表門

写真３　ナマコ壁の漆喰塗りの施工状況

修理にともない傷んだ漆喰を解体したところ、破損が瓦のズレによって発生していたことが判明したため、瓦を荒壁に適切に固定出来るよう釘などの納まりを見直した。

ナマコ壁の漆喰は、瓦の目地を埋め、瓦面より盛り上げて漆喰の下地を施し、仕上の上塗を施していく作業を、漆喰が乾燥してしまわない間に一連で行う必要がある。このため天候や気温、漆喰の乾き具合を見極めながら、左官職人が作業人数や時間をきめ細かく調整することに心を砕いた結果、良好な仕上がりを確保し、大庄屋の表門としての堂々たる姿を取り戻すことが出来た。

４．耐震補強工事

表門は堅牢な印象を与える外観をしているが、部屋の間仕切り壁が少ないことに加え、天井が設けられていないなど、柱上部で水平を固める要素が少ないことが起因して、構造解析を行った結果、大地震時に建物全体が捻れるように変形し、倒壊する恐れのあることが判明した。

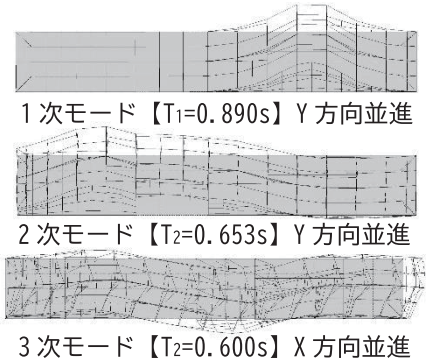

図１　表門の構造解析結果

写真４　野地の取り付けた鉄骨補強材

建物を効率良く補強するためには、室内に耐震壁を新設したり、柱上部で水平に鉄骨材を配する方法が検討されたが、内部を寸断し、歴史的建物としての本来の空間性が損なわれることは看過できない、との所有者の明確な指摘を受けて、屋根の野地に沿って鉄骨材を添える方針とした。

弥生時代後期の土屋根建物
－旧吉備中学校校庭遺跡の発掘調査－

有田川町教育委員会　川口　修実

１．はじめに

旧吉備中学校校庭遺跡は、有田川左岸の河岸段丘に立地する弥生時代から中世にかけての集落跡である。これまでの調査によって、弥生時代においては北部九州産の青銅鏡やガラス玉などが出土し、小規模ながら鉄器製作や赤色顔料（水銀朱・ベンガラ）の精製も行うなど、有田地方の拠点的な集落であったことが判明している。

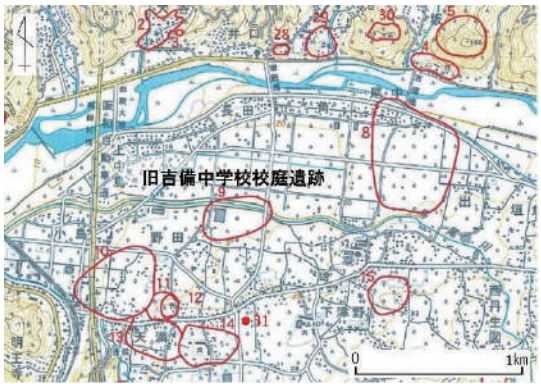

図１　旧吉備中学校校庭遺跡の位置

２．調査成果

令和３年度に実施した調査は、第１次調査の西側隣接地であり、弥生時代の遺構としては第１次調査で確認されていた竪穴建物１・４、溝２・４の延長部を検出した他、新たに弥生時代後期の円形建物１棟（竪穴建物 32）と方形建物１棟（竪穴建物 31）を確認した。比較的建物が密集しており、これまでの想定通り調査地周辺が居住域の中心であったと考えられる。

竪穴建物 32 では、床面上から垂木などの建築部材が炭化した状態で数多く出土しており、火災に遭っている状況がうかがえる。本遺跡では、これまで 30 棟の弥生時代の竪穴建物を検出しているが、焼失した建物が確認されたのは初めてである。

垂木とみられる部材のうち、遺存状態の良いものは長さ 1.3m 以上、幅 22 cm、厚さ２cm程度の板状をなし、その表面には加工痕をとどめるものがあることから、垂木は板状であったと考えられる。樹種同定の結果、分析した炭化材のほとんどはスダジイであり、使用された建築部材に斉一性があるという特徴が明らかとなった。

炭化した建築部材の上面には、炭化物や焼土粒を多く含む粘質土が、主柱穴より外縁側に向かって厚く堆積し（最大 25 cm程度の厚み）、主柱穴の内周を巡るように焼土が分布して一部が硬化していた。この堆積土は、その検出状況から判断して

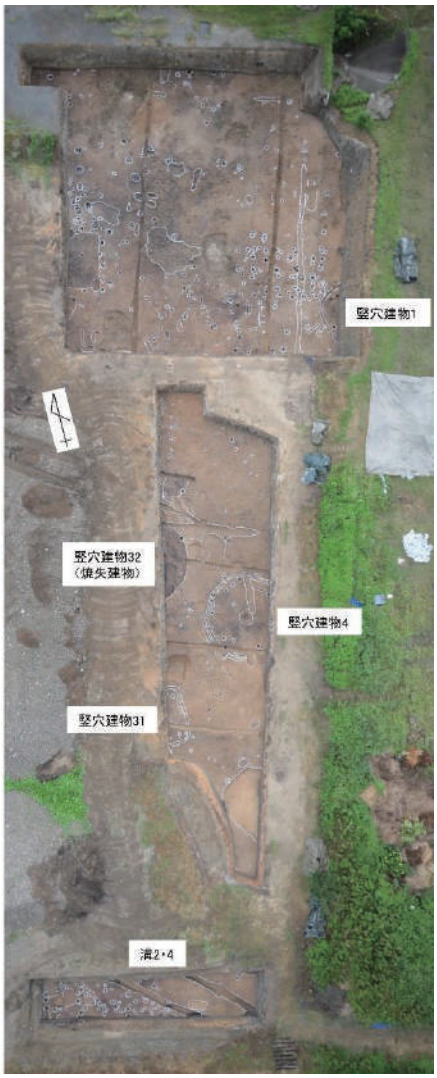

写真１　弥生時代の主な遺構

建物の焼失時に屋根上から崩落した屋根土に由来する堆積土であった可能性が高く、本建物は土屋根構造であったと推定される。

３．まとめ

和歌山県内においては、小松原Ⅱ遺跡（御坊市）で炭化材の上に焼土が認められることから土屋根の建物であった可能性が指摘されていた。しかし、弥生時代の焼失した竪穴建物の中で明らかに土屋根構造であったことを証明できる調査事例はこれまで確認されておらず、本事例は県内における弥生時代の竪穴建物の構造や建築用材の選択の問題を知る上で貴重な発見と言える。

写真２　竪穴建物 32　屋根土検出状況と堆積土の詳細写真

写真３　竪穴建物 32　炭化した建築部材の検出状況

写真４　復元された土屋根構造の竪穴建物（鳥取県　妻木晩田遺跡）

二重の堀を巡らした山城跡
－御坊市　八幡山城跡の確認調査－

御坊市及び日高郡６町埋蔵文化財保護行政事務協議会　川崎　雅史

１．はじめに

八幡山（やはたやま）城跡は南北朝時代に吉田村の領主で、道成寺の瓦や、かつてあった梵鐘に名を残す吉田氏の城であったとされる。吉田氏は、矢田荘の領主で土生城を拠点とする逸見氏や川上荘の領主で和佐山崎城を拠点とする川上氏と姻戚関係を結び、南朝方であったことが分かっている。

城跡が立地する八幡山は道成寺の西にある独立丘陵で、麓を熊野街道が通過し、愛徳山王子や海士王子が立地するなど交通の要衝に位置する。東の中腹には吉田八幡神社が鎮座し、今は廃寺となった神宮寺の雲性寺(浄国寺)も併存していた。

城跡の北と西側は開墾されて畑となっていたが、頂上部と南東側は手が加えられず比較的旧状を保つと考えられる。現状で窺う城の構造は、標高 72mの頂上部に東西に長い楕円形の主郭（東西約 30m、南北約 20m）を配し、北側に付曲輪を置いている。周囲には同心円状に２段の帯曲輪を巡らし、尾根続きとなる西側には鞍部を利用した堀切を掘削し、東西軸線上の曲輪端には土塁を盛っている。城全体の規模は東西約 70m、南北約 50mである。

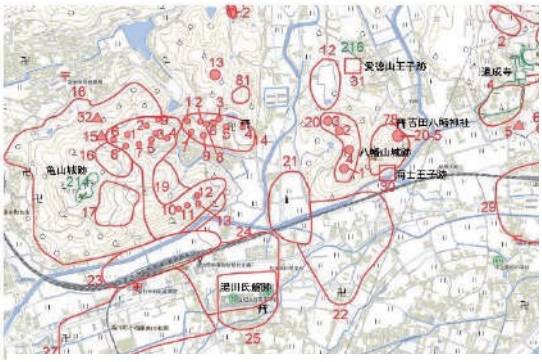

図１　遺跡位置図

２．調査の内容

調査では幅 1.5m のトレンチを３本設けた。このうちトレンチ１は主郭から東方向の帯曲輪にかけて、トレンチ２は主郭から北・南方向の帯曲輪にかけて設定した。また、トレンチ３は西方向の帯曲輪から堀切にかけて設定した。

調査の結果、主郭部と付曲輪で掘立柱建物の柱穴や土坑、炉などを検出した。調査範囲が限定的であったため建物規模等は明らかでないが、柱穴が小規模であることから比較的簡素な建物であったことが窺える。炉は直径 30 ㎝の穴の周囲が比熱して赤く硬化したもので、高熱を伴う小鍛冶などの作業をおこなっていたと考えられる。実際、炉の埋土を乾燥させて磁石を近づけると吸着される鉄粉があり、その蓋然性は高い。

帯曲輪の東は、外側に部分的な土塁を伴うものと考えていたが、二段とも岩盤を掘削した堀になっていることが明らかになった。さらに北側でも畑の下に削平された堀が２段にわたって残存していた。また、南側の下段でも堀が見つかり、西側でも堀の痕跡が確認できることからも、本来は頂上部の主郭の周りに全周しないものの２重に堀（横堀）を巡らす構造であった可能性があり、防御性に優れた城であったと言える。

出土した遺物には少量の東播系須恵器捏鉢、土師器皿・土釜、鉄釘があり、土器類は 14 世紀以前であると評価できる。これらの遺物の内容や量から、言い伝え通り南北朝時代に使われたことが明らかになり、籠城ではなく見張り程度に城詰めしていたことが窺える。

３．まとめ

八幡山城跡は一部開墾により削平されるものの、比較的良好な状態で残存していることが明らかになった。また、遺物から伝承通り南北朝時代に使われていたと判断できる。ただ、縄張編年からは横堀が採用されていることで戦国時代後期以降に改修されているとの評価もされている。横堀については兵庫県三木市の吉田住吉山遺跡の調査事例などから、最近では南北朝時代から採用されていたことが明らかになっている。また、頂上部の居住区に堀を複数巡らす構造は弥生時代の高地性集落に見られる。戦国時代後期以降の横堀は基本的に直線的に築かれるが、八幡山城跡の横堀は地形に合わせて弧状に築かれ、むしろ頂上部の曲輪を囲繞することを重視している。

以上のことから、八幡山城跡の横堀が戦国時代の改修によるものとするのを全面的に否定できないものの、改修の痕跡が確認できないこと、南北朝時代以降の遺物が出土しないこと、戦国時代に使われたと言う記録が残っていないことなどから、八幡山城跡の構造は南北朝時代のものと評価するのが妥当である。

八幡山城跡は南北朝時代の構造を遺す数少ない山城であるとともに、城郭史を考えるうえで貴重な資料であると言える。

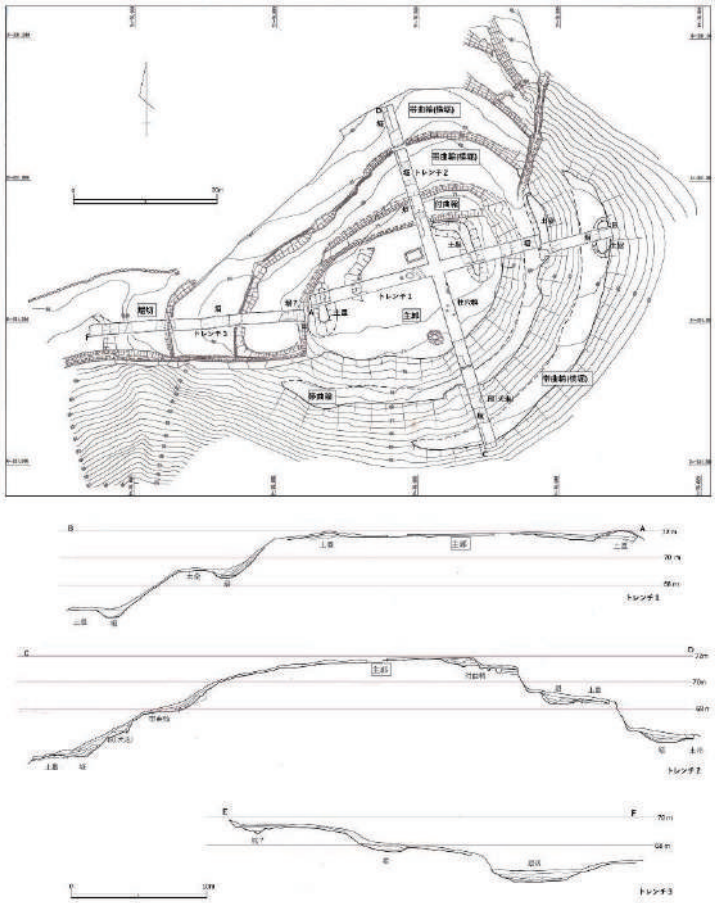

図２　八幡山城跡遺構図

写真１　八幡山城跡と日高平野
北東上空から

写真２　八幡山城跡調査状況
南東上空から

太田・黒田遺跡でみつかった古墳時代前期ガラス小玉の土製鋳型
－県内初の出土事例（第 97 次発掘調査）－

（公財）和歌山市文化スポーツ振興財団　藤藪　勝則

１．はじめに

紀の川南岸、JR 和歌山駅の東側に営まれた太田・黒田遺跡は、弥生時代前期から江戸時代にかけての長期にわたる多種多様な生活の痕跡と、各時代の生活道具が多量にみつかる県内屈指の集落遺跡である。

特に弥生時代では、集落の中心部とみられる今回の調査地（第 97 次調査）周辺において、直径が 10.4m以上を測り、床面に赤色顔料（酸化鉄（ベンガラ））が点在してみつかった前期の大型竪穴建物（第 97 次調査）のほか、床面積が約 50 ㎡を測り、平面隅丸長方形で底面が一方向に傾く「斜坑柱掘方」をもつ中期の大型掘立柱建物、またそれに隣接する大型の井戸（第 61 次調査）がみつかっている。さらに古墳時代の集落は、弥生時代後期中葉以降の集落を踏襲し、調査地周辺では古墳時代初頭から前期の竪穴建物（第 51 次調査）のほか、井戸や廃棄土坑など多数の生活痕跡がみつかっている。よって、古墳時代集落も調査地周辺にその中心部が展開していると考えられる。

２．土製ガラス小玉鋳型について

土製ガラス小玉鋳型は、古墳時代前期の 569 井戸から出土した。この井戸の平面形は楕円形で、断面形はＵ字形である。規模は、長径 2.92m、短径 2.35m、深さは検出面から 1.58mを測る。この井戸は、埋土の堆積状況から少なくとも３回の掘り直しが行われており、井戸として

図１　土製ガラス小玉鋳型の出土位置（97 次調査地）

廃絶した後は廃棄土坑となっている（写真２・３）。

土製ガラス小玉鋳型は、すべて破片で３点出土している。そのうち、写真１には２点（１・２）を示し、図２には１の実測図を掲載した。鋳型は、溶解したガラスを成形するための直径４㎜程度の円形の穴が多数みられるもので、中央には紐通し用心芯を差し込み立てるための直径１㎜程度の小穴がみられる。断面観察では、幅４㎜程度を測る方形の窪みの中央から、細い穴が下方にのび、その先端は尖っていることが確認できた。また、１には鋳型の縁辺部がわずかに遺存する。

胎土は長石粒など砂粒を多く含み、色調は小穴がみられる表面は黄褐色、裏面が灰色となっている。この色調の差は、鋳型の使用方法を示すものとして注目される。

３．まとめ

このような土製ガラス小玉鋳型の出土例は、和歌山県内では初例となる。また共伴する出土土器の時期から、古墳時代前期前半（庄内式併行期第４段階～布留式併行期古段階）のものとみられ、近畿地方では最も古い出土事例となる。

この鋳型の使用方法について、現段階ではあまり詳しいことは分かっていないが、古墳時代前期における紀の川下流域での先進的な生産活動を示す重要な遺物と考える。

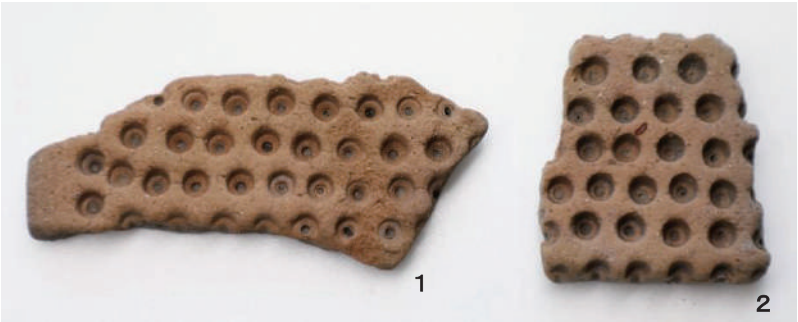

写真１　太田・黒田遺跡から出土した土製ガラス小玉鋳型

写真２　569 井戸全景（南西から）

写真３　569 井戸地層断面（北から）

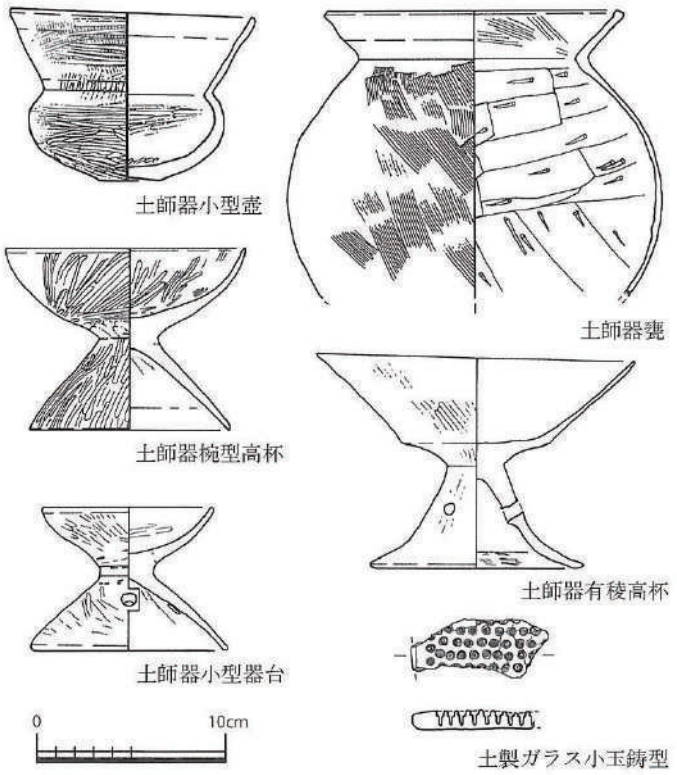

図２　569 井戸出土遺物実測図

西田中神社羊宮神社本殿・八幡神社本殿の保存修理
－西田中神社の社殿からみた「田中荘八社」－

（公財）和歌山県文化財センター　寺本　就一

１．県指定文化財（建造物）西田中神社羊宮神社本殿・八幡神社本殿の保存修理

羊宮神社本殿は、一間社隅木入春日造、檜皮葺。室町時代天文年間（1532～1555）以前の建立で、木鼻、蟇股、手挟等の彫刻は室町後期の様相をよく伝えており、向拝頭貫木鼻は鯱の彫物は珍しく、現在他に類例はない。

八幡神社本殿の建立年代は、高欄の擬宝珠から寛永 12 年（1635）であることがわかる。春日造の本殿が多い当地方にあって、類例の少ない四座の二間社流造の社殿である。蟇股等の彫刻は優れている。

写真１　西田中神社竣工全景（手前：八幡、奥：羊宮）

両社殿の屋根の檜皮葺は、前回の解体修理から 30 年が経過し、平葺全面で劣化が進んでおり、箱棟廻り木部の腐朽も認められた。また、柱の金襴巻・向拝・長押・組物などの彩色や軸部・縁廻り・壁面の丹塗（赤）・墨塗・胡粉塗（白）等の塗装に鱗状の剥離や剥落が生じていた。そのため、令和５年度と６年度で屋根葺替・塗装修理を中心とした保存修理工事を行った。

保存修理は、まず作業用の素屋根を建設した。古い檜皮葺を解体し、平葺きを全面葺き替えた。箱棟、縁や木階段の補修の木工事を行った。彩色の経年劣化を防ぐために剥落止めを行い、完全に剥落した箇所の補筆を行い、丹塗や胡粉塗・黄土塗・墨塗などの褪色の著しい部分は在来の工法に倣って塗り直した。箱棟・高欄の飾り金具は取り外して、清掃・整形・金箔押しを施して、元の位置に付け直した。令和６年９月にすべての工事が完成した。

２．田中荘八社

田中荘は、平安期から戦国期に見える荘園名で、紀の川市の旧打田町域の南半部にある。田中荘には「田中荘八社」という産土神があり、『紀伊続風土記』には「荘中地主神八社ありこれを田中の八社と称す何れも古は社殿壮麗に神田も多くあり…」と記されている。打田にあった山王権現社・若宮八幡宮（上ノ宮）・中ノ宮・鎮守宮、竹房の一ノ宮、中井阪の羊宮、尾崎の若宮八幡宮（下ノ宮）、上野の妙見社がそれにあたる。

図１　『紀伊続風土記』　田中荘　挿図

３．田中荘八社の旧所在地と旧社殿についての考察

昭和 20・21 年に田中荘八社は、東西に二つに分けられて合祀された。山王権現の境内に若宮八幡宮（上ノ宮）・中ノ宮・一ノ宮（竹房神社）の社殿を遷して「東田中神社」とし、羊宮境内に若宮八幡宮（下ノ宮）、妙見社と下井阪の住吉社を遷して「西田中神社」とした。

図２　『打田村絵図』（部分　南半分）

東田中神社は、社殿が４殿とも移築されたが、昭和 28 年に台風で上ノ宮が倒壊、昭和 30 年代に火災で中ノ宮が焼失した。西田中神社は若宮八幡宮（下ノ宮）の社殿のみ移築され、妙見社・住吉社の社殿は移されていない。後に元の場所に遷座されている。なお、住吉社は『紀伊続風土記』では八社に含まれていない。

東田中神社のそれぞれの旧社地は、『打田村絵図』『田中村郷土誌』から概ね知ることが出来る。八社の一つであった鎮守社は明治 28 年（1894）に若宮八幡宮（上ノ宮）に遷されていた。一ノ宮は『竹房村地所図面』から旧所在地はわかる。

社殿については、山王権現（東田中神社本殿、一間社隅木入春日造　正面軒唐破風付き　延宝８年（1680）建立）、一ノ宮（東田中神社境内社旧竹房神社本殿、一間社隅木入春日造　桃山時代　県指定文化財）、羊宮（羊宮神社本殿）、下ノ宮（八幡神社本殿）の４棟は現存する。焼失した中ノ宮は、天沼俊一著『続成蟲樓随筆』（昭和 21 年 11 月発行）から江戸時代前期に建立されたもので、鯱の木鼻があり、羊宮神社とは向拝の手挟が海老虹梁となっている他はほぼ同じスタイルであったことがわかる。上ノ宮の社殿については『打田村絵図』に平入りの二間社の建物として描かれており、八幡神社本殿と同様の流造であったと想像できる。鎮守社は一間社春日造として描かれている。妙見社・住吉社は、遷座され比較的新しい小規模な社殿が建立されているが、元の姿はわからない。

写真２　西田中神社羊宮神社本殿

絵図等からわかる社殿の形状だけでなく、中ノ宮と羊宮神社の鯱の木鼻彫刻、羊宮神社・八幡神社と中ノ宮の脇障子彫刻の倶利伽羅龍王、山王権現と一ノ宮（竹房神社）の虎を主題とした脇障子彫刻（竹房社は別途保存）などの特徴が認められる。これらを見ていると、天正 13 年（1585）の兵火に罹り焼失したとされる田中荘八社の社殿が、焼け残った羊宮・一ノ宮の社殿を意識しながら建立されていった様子が想像できるようで面白い。

図３　田中荘八社の旧所在地と旧社地周辺の現状
※地理院地図に加筆

西田中神社の社殿などの彫刻の詳細については展示パネルや当センター季刊誌「風車 106 号」を参照願いたい。

重要文化財　増田家住宅　表門（竣工）

【連動企画】

「紀州のあゆみ」（和歌山県内文化財調査成果展）開催中

令和６年 11/6㊌～12/2㊊

岩出市民俗資料館企画展示室

主　　催　公益財団法人　和歌山県文化財センター（http://www.wabunse.or.jp/）
協　　力　岩出市民俗資料館
後　　援　和歌山県教育委員会、和歌山市、紀の川市教育委員会、岩出市教育委員会、御坊市教育委員会、新宮市教育委員会、有田川町教育委員会、日高町教育委員会、日高川町教育委員会、白浜町教育委員会、公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団（順不同）

「地宝のひびき－和歌山県内文化財調査報告会 2024－報告資料集
発行日　令和６（2024）年 11 月 24 日
発　行　公益財団法人　和歌山県文化財センター
〒640-8301　和歌山市岩橋 1263 番地の 1
TEL　073-472-3710　FAX　073-474-2270
E-mail　maizou-1@wabunse.or.jp
ホームページ　http://www.wabunse.or.jp/
印　刷　初田印刷株式会社

公益財団法人
和歌山県文化財センター